



第85回 草刈り考

▼草刈り考

私の実家は鳥取市郊外の田舎にあり、母が一人で暮らしている。もともと農家でもあったので、むやみに屋敷が広い。祖父が健在のころは、庭や畑の手入れは念入りで、毎日のように庭を掃除していた姿を思い出す。今は母一人では手に負えず、長男の私の出番となるわけだが、仕事の関係でせいぜい月1-2回しか実家には帰れない。立夏のこの季節、雑草の勢いはたいへんなもので、ちょっと油断すると草刈りがたいへんである。祖父のような丁寧なことはできないので、とりあえず刈り払い機で草刈りをする。庭のような石や塀があるところは、ワイヤー式が便利である。刈り払い機のエンジンをかけプロテクターをつけて、さあ草刈りだと意気込んでみる。放置された畑地の草刈りをもっとたいへんだ。これから夏にかけて草刈りを定期的にやらないと、あっという間に雑草に占領されてしまう。

▼自然の中で暮らすということ

私自身は鳥取県西部の街なかで暮らしている。実家の庭や畑の管理は、月2回程度ではとても追いつかない。雑草で庭が覆われると荒れ果てた感じがして、母の居心地も悪い。そもそも、なぜこんな広い庭が必要だったのだ、と恨み言のひとつも言ってみたくなる。むかし農業をやっていたころは、4世代がこの家で暮らし訪問客も多く、皆この庭を眺めていた。だからこそ、祖父は毎日のように庭の手入れをかかさなかった。いまは来客もなく、母が一人で暮らす古びた家と庭をどうすればよいのか、悩ましいことである。昔は、春にフキノトウ、今時期はタケノコ、夏はキュウリやナスと、季節のものが食卓にあがっていた。里山や畑がきちんと生活に密着していたのだ。竹林も、農作業に必要な資材として無駄にすることはなかった。その土地での暮らしが希薄になれば、役立っていたはずの自然のひとつひとつが負に転換してしまう。

▼思い出と現実

自分が高校まで育った実家が荒れはてるのを見るのは、忍びないものがある。できることなら、往時と同じような風景を維持したい。しかし、農業などの生活実体がなくなり、目に見える風景だけを維持することに、どんな意味があるのだろうか。母のいまの暮らしがあるにせよ、介護の必要な高齢者が一人で暮らすような環境ではない。私と同じような悩みを抱えている同世代の人は、意外と多いのではないだろうか。思い出だけでは、生きられない。だが、思い出を捨てつづけていく先には、何が待っているのだろうか。草刈りの手をとめ、暮れゆく庭を眺めながら、ふと呆然としてしまうのである。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)